

# 北海道伊達市有珠モシリ遺跡発掘調査概要報告5

Overview on Archaeological Excavation of the Usumoshiri site in  
Date City, Hokkaido, Vol.5

青野 友哉 AONO Tomoya  
永谷 幸人 NAGAYA Yukihito  
三谷 智広 MITANI Tomohiro

## 要 旨

筆者らは2019年から縄文晩期～続縄文前半期の遺跡である北海道南西部の有珠モシリ遺跡の発掘調査を実施している。本稿では2024年9月に実施した貝塚と墓址の調査結果について報告する。遺跡である島の中央部の調査区(2区)では、2023年度に引き続き縄文晩期の貝層を掘り下げ、ブロックサンプルを採取した。また、島の中央部やや西寄りの調査区(3区)では、続縄文前半期の貝塚と墓址を検出した。貝塚からは鹿角製の銚頭など続縄文前半期の優美な骨角器が出土した。墓址からは人骨が部分的に残存し、かつ散乱している出土状況から複葬に伴う一次葬と判断した。

## 1. 本稿の目的

筆者らは2018年から科学研究費助成事業「狩猟採集文化と農耕文化の接触による社会の変容と地域的多様性に関する学際的研究」【基盤研究(B)代表：青野 JSPS 科研費18H00749】の一環として北海道伊達市有珠モシリ遺跡の調査に取り組んできた(青野・永谷2021、青野・永谷・三谷2022)。2020年9月には、縄文晩期後葉の人骨11体が出土した多数合

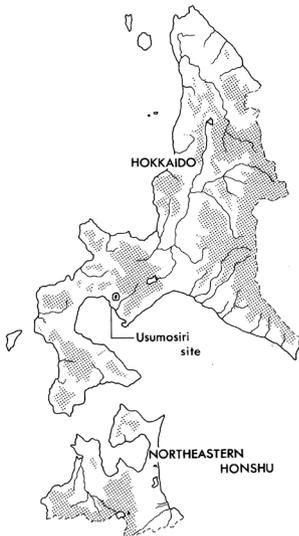


図1 有珠モシリ遺跡の位置

葬・複葬例を検出し、このうち8体の頭部には、鈍く分厚い刃による傷跡や鈍器による陥没骨折治癒痕があるほか、石鏃の刺さった脛骨も存在した。

これら受傷人骨の存在は、日本列島規模での社会変容の存在を示す可能性があるため、2022年度からは「受傷人骨の骨科学分析による縄文終末期の埋葬原

理と社会変容の解明」【基盤研究(B)代表：青野 JSPS 科研費22H00741】として取り組み、有珠モシリ遺跡の発掘を継続することとした(青野・永谷・三谷2023)。

2024年度調査では、昨年度に引き続き、全国的に事例の少ない縄文晩期の貝層からサンプルの採取を試みた。また、2022年度に検出していた続縄文前半期の墓址について詳細を明らかにするために調査を継続することとした。本稿では2024年度に実施した有珠モシリ遺跡の発掘調査の概要について報告する。

## 2. 調査要項

遺 跡 名：有珠モシリ遺跡

登 載 番 号：J-04-61

所 在 地：北海道伊達市有珠町102

調 査 主 体：青野友哉(東北芸術工科大学教授)

発掘担当者：青野友哉(東北芸術工科大学教授)

調査参加者：佐藤祐輔(東北芸術工科大学准教授)・永谷幸人(伊達市噴火湾文化研究所)・近藤修(東大院理)・新美倫子(名古屋大博)・渡辺双葉(北海道教育庁)・三谷智広(パレオラボ)・中村謙伸(東大D2)・釜土真周・菅澤祥太・山本創大・永井祥太郎(3年)・岡田茉莉(札幌医科大M1)・戸田いちこ

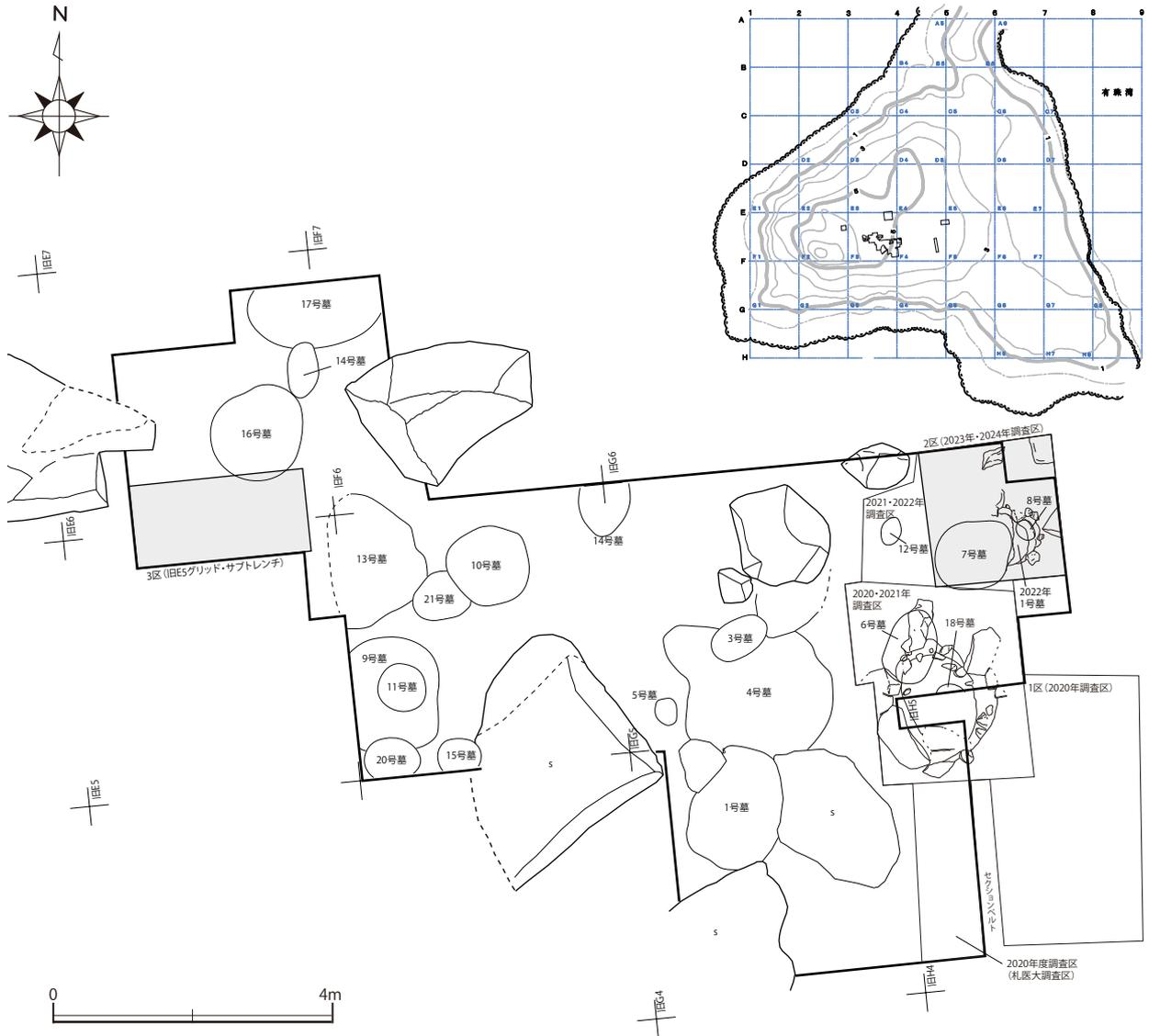


図2 調査区及び遺構配置図(実線太枠：札幌大調査区 網掛け部分：2024年度) (右上の遺跡全体図の大グリッドは20m×20m)

(芸工大M1)・堀籠光太郎(4年)・菅凜歩・佐藤陽一郎(3年)・日高幹・王みよう(2年)・菅野まみ(1年)

整理作業参加者：堀籠光太郎・中村悠河・菅凜歩・佐藤陽一郎・菅野まみ

調査面積：7.75㎡

調査期間：2024年9月3日(火)～9月11日(水)

出土文化財：土器・石器・骨角器・動物遺存体・人骨

出土数量：コンテナ3箱〔内寸679×367×122mm〕

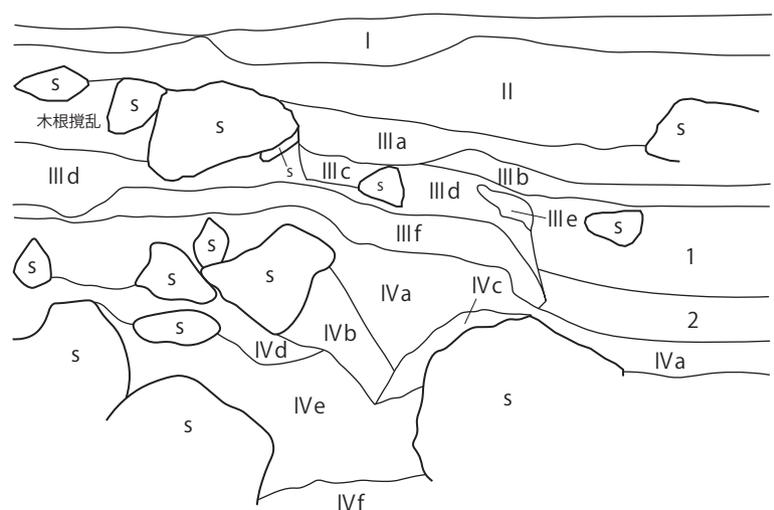
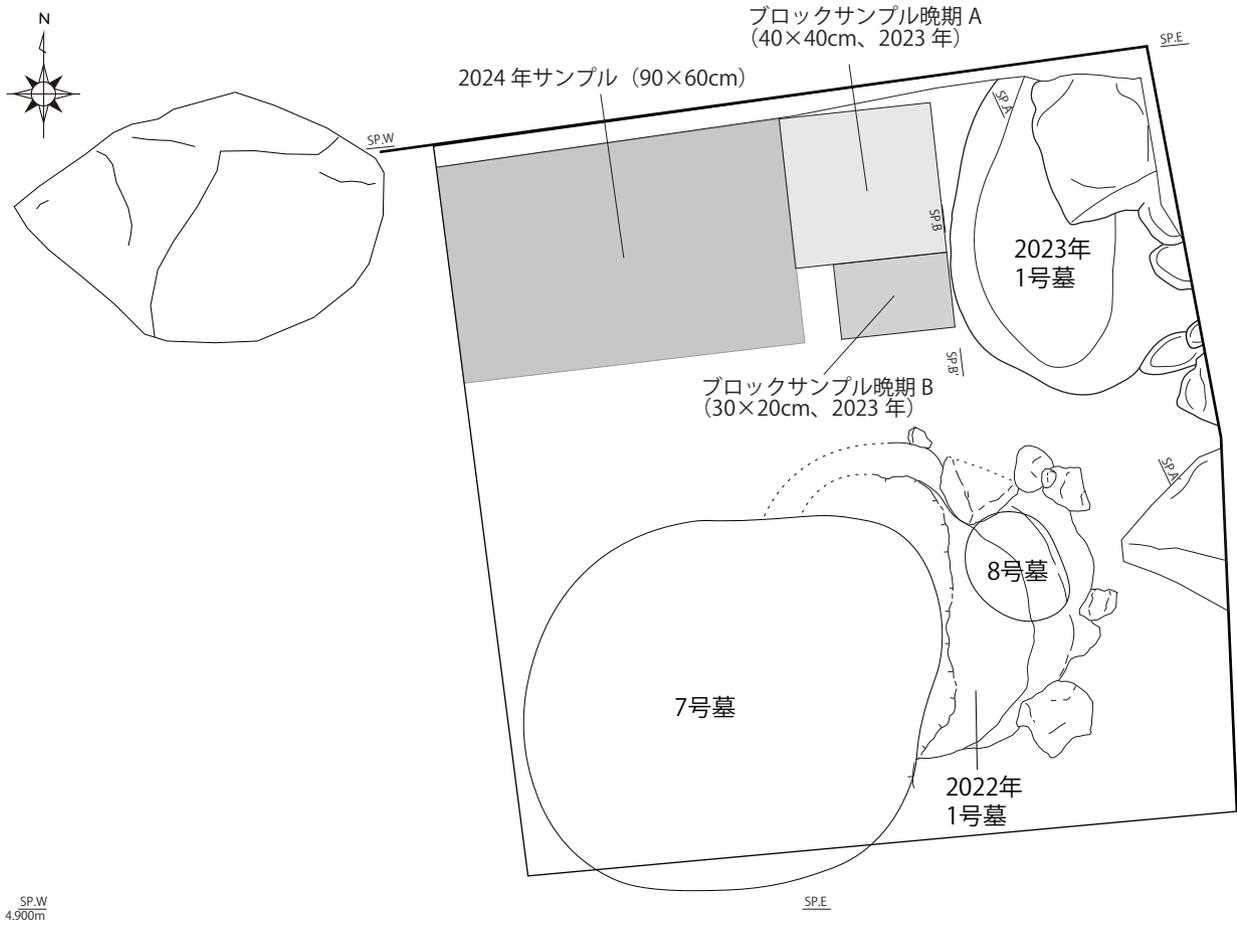
### 3. 縄文晩期貝層の調査

2023年度に縄文晩期の貝層のブロックサンプルを2箇所

から採取したが、2024年度はその西隣の貝層サンプルを採取することとした。これにより調査区北壁面に縄文晩期の貝層が現れるため、2023年度のブロックサンプルの層位をメインセクションの中に明示することができる。

2024年サンプルは調査区北壁に沿って90cm×60cmの範囲を設定して掘り下げた(図3・写真2～5)。調査区北壁はこれまでの調査で下位に行くほど南側にせり出していたため、掘り下げながら壁面を垂直にするように心がけた。そのため、サンプル採取箇所は下位に行くほど調査面積が広くなり、最終的に南北60cmの調査範囲となっている。

貝層は黒褐色土を主とする混貝土層であり、それらを除去すると縄文晩期の土器破片が表裏面を平坦にした状態で



調査区北壁

- |                          |                               |                        |
|--------------------------|-------------------------------|------------------------|
| I層：表土                    | IVa層：黒褐色土（貝骨含む・縄文晩期の貝層）       | 1層：茶褐色土（2023年度1号墓の覆土）  |
| II層：有珠b火山灰（Us-b・1663年降下） | IVb層：白色砂                      | 2層：黒茶褐色土（2023年度1号墓の覆土） |
| IIIa層：黒褐色土               | IVc層：貝魚骨層（縄文晩期の貝層）            |                        |
| IIIb層：黒褐色土（混貝土層）         | IVd層：黒褐色土（混貝土層・縄文晩期の貝層）       |                        |
| IIIc層：灰褐色土（灰層・ウニ殻を含む）    | IVe層：黒褐色土（混貝土層・破砕貝多い・縄文晩期の貝層） |                        |
| IIId層：黒褐色土（混土貝層）         | IVf層：黒色土                      |                        |
| IIIe層：黒褐色土（焼土を含む）        |                               |                        |
| IIIf層：白色砂（破砕貝を含む）        |                               |                        |



図3 2024年調査区および縄文晩期貝層サンプル範囲・土層断面図

密に出土する。中には動物骨が密集する層もあり、適宜写真記録を撮りながら掘り進めた。サンプルは人工層位で7回に分けて採取した。貝種はアサリが主体で魚骨を含んでいる。

土層は調査区北壁の断面図に記載したが、縄文晩期の貝層はIV c、IV d層、IV e層であり、貝層下には黒色土が堆積し、以下は基盤である安山岩塊へと続いている。

出土遺物は人工層位ごとに一括で取り上げており、土器破片はいずれも縄文晩期後葉の聖山式に属するものである。

図6-5は晩期貝層の人工層位7回目から出土した組合せ式釣針である。鹿角製で、チモトは肥厚しつつ角度を直角に曲げている。下端は内側が平坦な接合部であり、外側に3条の溝を有することから、別の部材を組み合わせて紐で結合する仕様となっている。ただし、釣針の全長は5.5cmと小さく、組合せとなった場合も大型魚類を対象としたサイズにはなり得ないことから、これは破損した釣針の補修と捉えるべきかもしれない。一方で組合せ式釣針の発生を考える上では重要な資料といえる。なお、溝にはアスファルトが付着している。

ブロックサンプルは水洗選別を行ない、現在種同定の作業を行っている。

#### 4. 3区貝塚(SM01)の調査

2022年度に札幌医科大学による旧調査区の西端を把握するために、標高5m地点を試掘調査した。その際に、札医大の旧E-5グリッドの壁面を検出し、グリッド底面を精査したところ、下顎骨を含む人骨が1.8m×0.3mの範囲から複数出土した。2024年度はこの散乱した人骨の下位に墓坑が存在する可能性を考え、東西2.5m、南北1.2mの範囲を遺構確認した。その過程で調査区の中央北側に貝層の広がりを確認したため、SM01として調査した(図4、5・写真6～9)。

貝層はマガキ、アサリ、ホタテガイからなり、厚さは現状で10cm程度と浅く、北側に傾斜している。遺物は鹿角製の銚頭、楔状製品、組合せ式釣針の軸部が出土しており、土器は恵山式土器であることから縄文前半期の貝塚であることは間違いない。

なお、調査区北壁面にはかつて札医大が調査した16号墓(縄文晩期の女性2体合葬墓)を調査した後の埋戻し土の一部が見えている。今回調査したSM01は16号墓よりも新しいことから、本来は16号墓の上面に縄文前半期の貝層が薄く覆っていたと思われる。貝層の傾斜から判断すると、SM01は16号墓の上面の窪みに堆積した貝塚と考えられる。

なお、札医大の旧調査の遺物を再整理した際に、16号墓の覆土に縄文前期の遺物が含まれていたのは上記のような遺構の重なりがあったためと改めて確認できた。

遺物は、図6-1が鹿角製の銚頭で返しが多数施されている。紐を通す穿孔は実測図裏面方向から施されている。

図6-2は鹿角製の楔状製品で、上端は斧状の工具で裁断された平坦面と線状の痕跡が複数あり、下端には断面形状をV字状にする意図を持って裁断された痕が残る。V字状の先端はわずかに欠けた部分もあり、使用痕の可能性もある。

図6-3は鹿角の又部分を用いた組合せ式釣針の軸部である。チモトを肥厚させて紐をかけやすく加工している。実測図右側の端部は斜めに削り出して結合面とし、端部は紐がかけられるように肥厚している。

図6-8～10は縄文前半期の土器破片である。8は壺の頸部から肩部にかけての破片で、頸部に5条の横走る沈線を持ち、肩部にRL帯縄文を横走させている。

9は内傾する頸部を持つ甕で、横走沈線の幅に比してやや幅広い無文帯を持つことから恵山Ⅱ式(青野2011)といえる。口縁部にはRL原体による縄文と口唇部に棒状工具による列点を施している。内面は板状の工具により横方向に平滑化した痕が残る。

10は上底の底部で外面はRL帯縄文が縦走している。内面は板状工具による刷毛目痕跡が残っている。

#### 5. 2024年1号墓の調査

##### (1)調査の経緯と経過

2022年度に札医大の旧E-5グリッドの底面を精査した際に下顎骨を含む複数の人骨が散乱して出土したため、人骨の下位に墓坑が存在する可能性を考えて調査した。

2022年度には調査区南壁に沿って幅0.3mのサブトレンチを設定して掘り下げている。今回はそれを利用しつつ、墓坑底面を特定し、円形の墓坑の約半分を調査した。

##### (2)墓の構造(図4、5)

墓坑は調査区南側に位置するため、2分の1以上が調査区外に存在する。現存する平面形は楕円形で、規模は東西1.0m、南北の残存部が0.6m、深さは0.2mである。

墓坑覆土から底面にかけて、獣骨片に混じって人骨が複数点出土したため、出土位置を平面的に記録し、全点番号を振って取り上げている(図5)。いずれも頸椎や指骨などの小さな

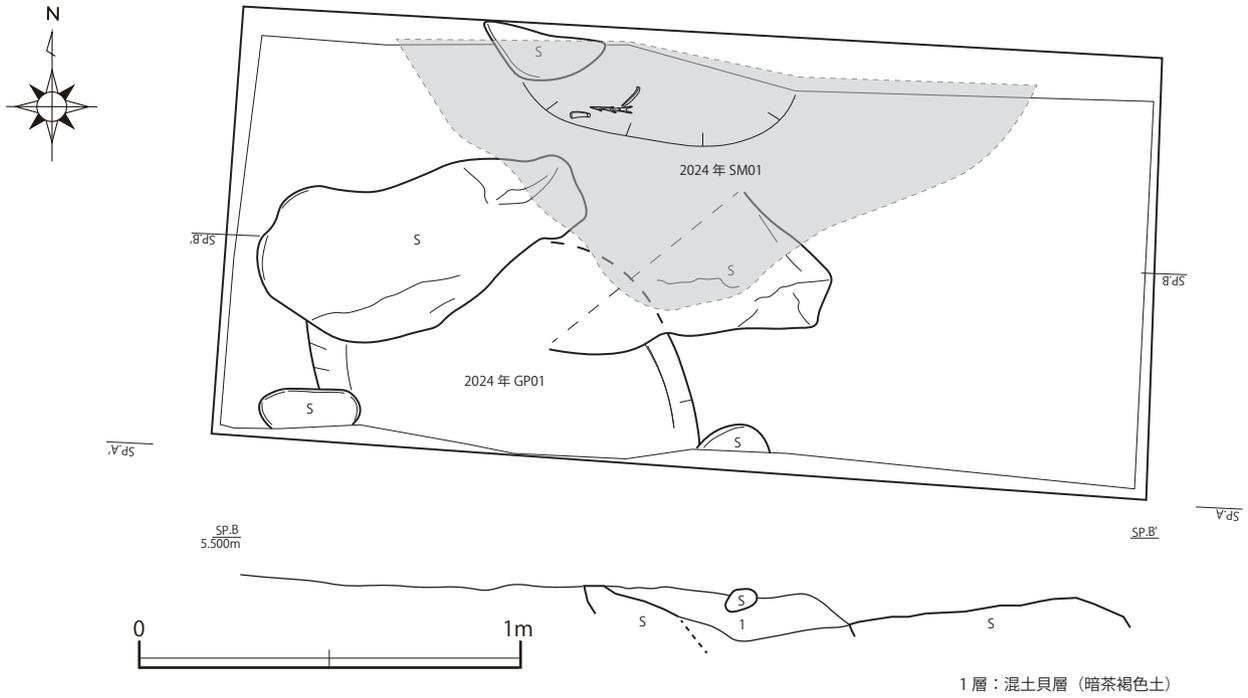


図4 2024年1号貝塚(SM01)の平面図・断面図・出土状況図

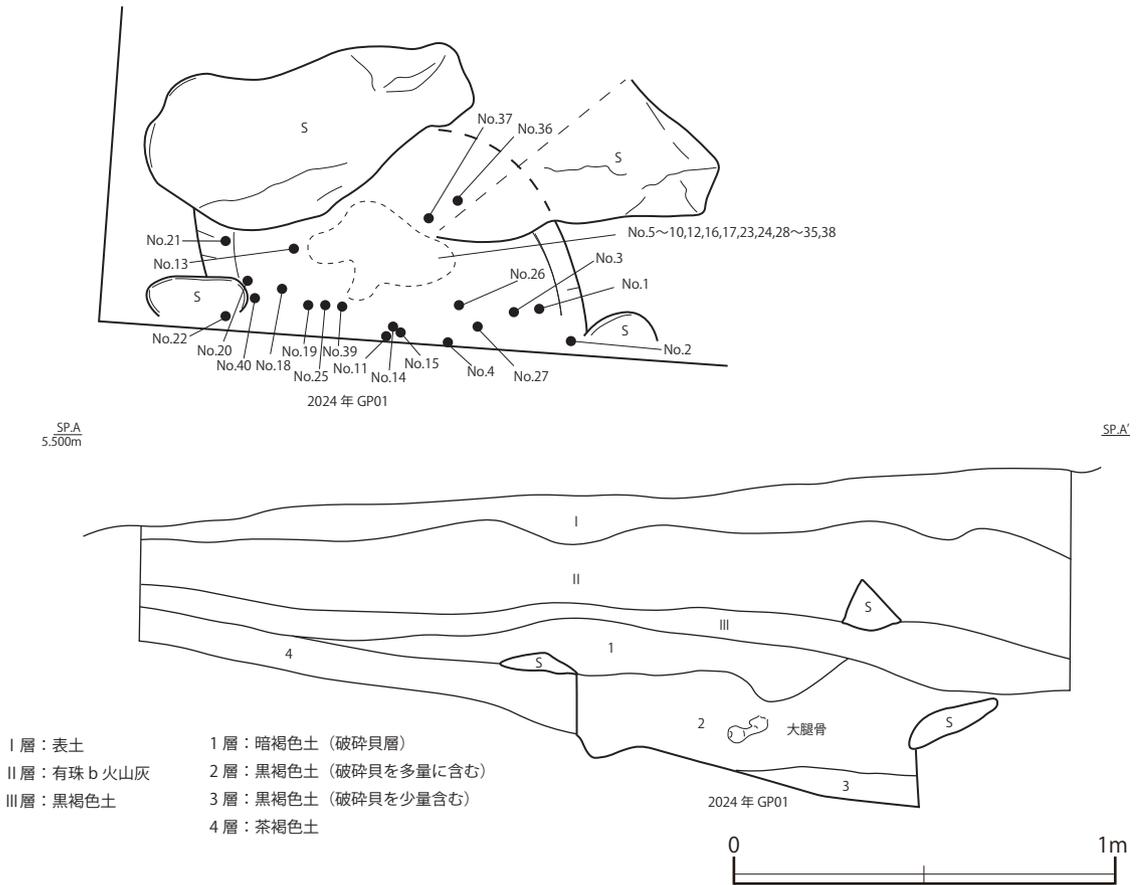


図5 2024年1号墓(GP01)の平面図・断面図・出土状況図

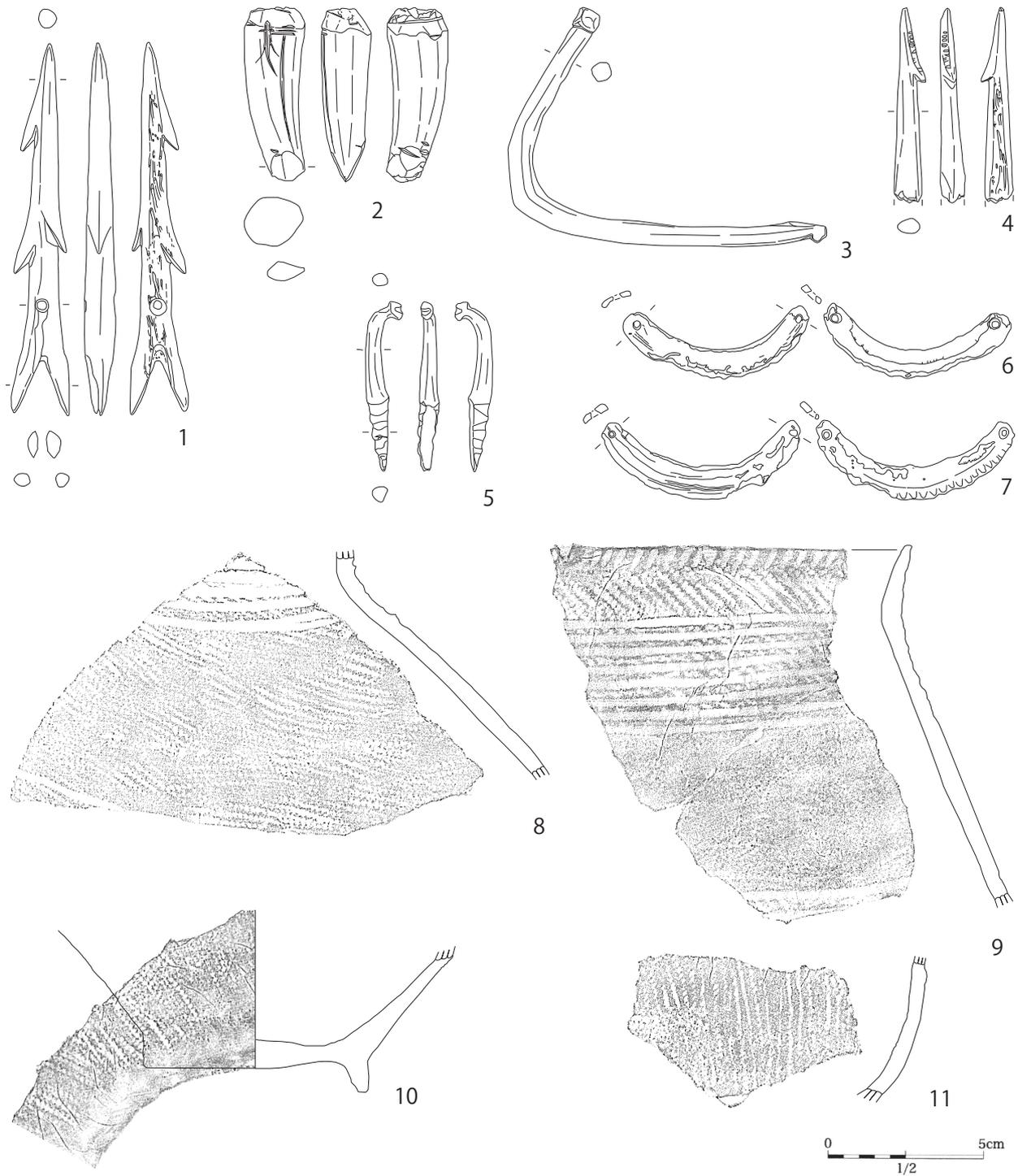


図6 出土遺物(1~3, 8~10 : 2024年SM01, 4 : 3区一括, 5 : 2区晚期貝層⑦, 6・7・11 : 2024年GP01)

骨であり、解剖学的位置関係を保っていないことから、複葬行為における一次葬墓の可能性を考えた。ただし、調査区南壁の墓坑覆土に大腿骨が見えており、ある程度大きな骨も残存していることがわかっている。墓の性格については、次年度以降に南半分を調査したのちに最終的な結論を出したい。

出土遺物は土器破片1点と貝製腕輪2点が出土している。図6の6, 7はベンケイガイ製の連結式貝輪である。ともに墓坑覆土から出土しており、本来は一次葬墓でセットとして用いられていた可能性がある。

図6-11は縦走る帯縄文と器表面を撫でる特徴から続縄

文前半期の恵山式土器の破片といえる。胴部上半の肩部はやや張る器形であり、恵山Ⅰ式ないしは恵山Ⅱ式(青野2011)の可能性がある。

## 6. 成果と課題

2024年の発掘調査では、縄文晩期の貝層をメインセクションとして図化することができ、合わせてブロックサンプルを追加することができた。また、続縄文前半期の貝層も調査することができたため、今後は時期の異なる貝層の対比が可能になる。さらに続縄文前半期の複葬に伴う一次葬墓の可能性のある墓址を検出したため、次年度以降に残りの範囲を調査するとともに、既存の出土人骨との接合関係などにより、遺跡内の墓坑群との関連性を明らかにする材料を得ることができた。

調査・報告にあたり、下記の機関および個人より指導・助言を得た(敬称略)。大西善幸(個人)、木村国夫(伊達アイヌ協会)、岩田廣美(いぶり噴火湾漁協)、北海道教育庁、伊達市教育委員会

本研究はJSPS科研費23K22013「受傷人骨の骨科学分析による縄文終末期の埋葬原理と社会変容の解明」(基盤研究(B)、代表：青野友哉)及び、23H04837「考古学的方法による先史人類における社会構造の研究」(学術変革領域研究(A)、代表：山田康弘)の助成を受けている。

### 参考文献

青野友哉, 2011.5 :「続縄文文化と弥生文化」, 甲元真之・寺沢薫編『講座日本の考古学』5 弥生時代(上). 青木書店. pp.522-545

青野友哉・永谷幸人, 2021.3 :「有珠モシリ遺跡発掘調査概要報告」『歴史遺産研究』第15号. 東北芸術工科大学. pp.59-68

青野友哉・永谷幸人・三谷智広, 2022.3 :「有珠モシリ遺跡発掘調査概要報告2」『歴史遺産研究』第16号. 東北芸術工科大学. pp.11-22

青野友哉・永谷幸人・三谷智広, 2023.3 :「有珠モシリ遺跡発掘調査概要報告3」『歴史遺産研究』第17号. 東北芸術工科大学. pp.63-74

青野友哉・永谷幸人・三谷智広・中村賢太郎・パレオ・ラボ AMS年代測定グループ, 2024.3 :「有珠モシリ遺跡発掘調査概要報告4」『歴史遺産研究』第18号. 東北芸術工科大学. pp.49-60

大島直行, 2003.「Ⅲ. 有珠モシリ遺跡の概要」『図録 有珠モシリ遺跡』北海道伊達市教育委員会. pp.35-58

表1 2024年1号墓点上げ遺物一覧

取上げ番号	標高(m)	種別
N0.1	5.088	人骨片
N0.2	5.126	人骨片
N0.3	5.119	人骨片
N0.4	5.048	人骨片
N0.5	5.018	人骨片
N0.6	5.045	人骨片
N0.7	5.055	人骨片
N0.8	5.168	人骨片
N0.9	5.090	人骨片
N0.10	5.109	人骨片
N0.11	5.099	人骨片
N0.12	5.170	人骨片
N0.13	5.160	人骨片
N0.14	5.165	人骨片
N0.15	5.159	人骨片
N0.16	5.122	人骨片
N0.17	5.136	人骨片
N0.18	5.077	人骨片
N0.19	5.031	人骨片
N0.20	5.080	人骨片
N0.21	5.105	人骨片
N0.22	5.164	人骨片
N0.23	5.086	人骨片
N0.24	5.062	人骨片
N0.25	5.080	人骨片
N0.26	5.096	人骨片
N0.27	5.155	人骨片
N0.28	5.130	人骨片
N0.29	5.145	人骨片
N0.30	5.120	人骨片
N0.31	5.140	人骨片
N0.32	5.095	人骨片
N0.33	5.069	人骨片
N0.34	5.060	人骨片
N0.35	5.115	人骨片
N0.36	5.055	人骨片
N0.37	5.038	人骨片
N0.38	5.123	人骨片
N0.39	5.019	人骨片
N0.40	5.038	人骨片



写真1 調査区[2区:奥、3区:手前](西から)



写真2 調査区[2区]近景(西から)



写真3 2区晩期貝層の調査(南西から)



写真4 晩期貝層の遺物出土状況(南から)



写真5 晩期貝層の断面(南から)



写真6 調査区[3区]近景(北西から)



写真7 SM01 骨角器出土状況(北東から)



写真8 SM01 骨角器出土状況(南東から)



写真9 SM01 セクションベルト(北から)



写真10 GP01 調査風景(東から)



写真11 GP01 出土状況(南から)



写真12 GP01 貝製腕輪の出土状況(北西から)



写真13 GP01 出土状況(北から)



写真14 GP01 半裁状況(北から)



写真15 GP01 半裁状況(南から)



写真16 調査参加者(東北芸工大・東大理学部・札幌医大)

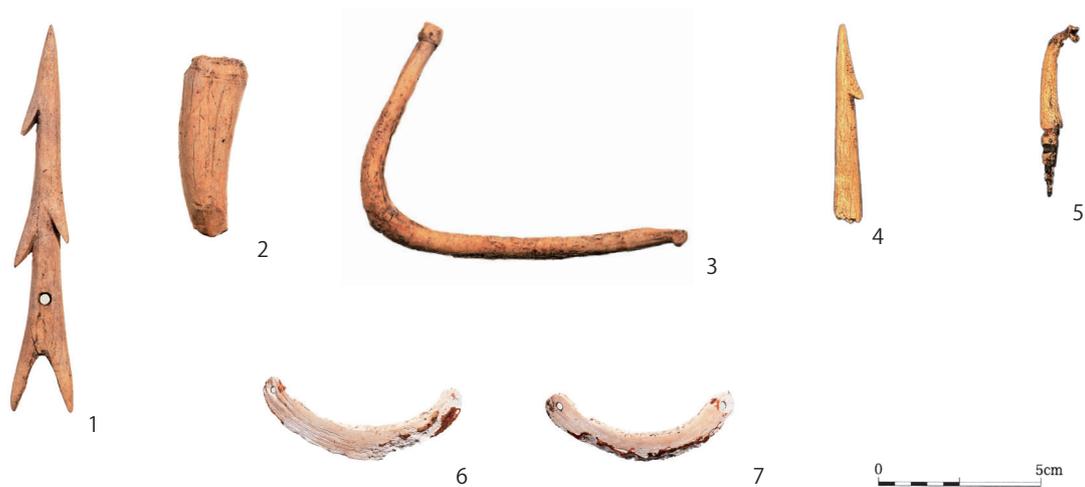


写真17 2024年SM01出土遺物(1~3)、3区一括(4)、2区晩期貝層⑦(5)、2024年GP01(6・7)



写真18 2024年SM01出土土器(1~3)、2024年GP01出土土器(4)